１９２５年（大正14年）〔21歳〕

「辰雄日誌１９２５」No. 6　（4）

――１９２５年４月１～30日――

小池辰雄

○１９２５年４月１日（水）

晴。今日は例の虚言をいってよい日である。それを今晩になって気がついた。山本で一つ何か笑わせてやればよかったと思った。山本へ、義雄さん入学式で、その留守居に行った。皆丈夫でピンピンして居る。「よく学び、よくあそべ」という修身の書の第１章は僕達にも大切な教訓である。

Revere God and do the reight.　――Carlyle

〔神を敬し義を行え。――カーライル〕

姉さんに夕飯をと、とめられたが、帰って来た。夕飯を食べて喜ばせて上げればよかったと思った。

４月来れり。春盛りなり。我が胸躍る。
４月来れり。去年を思う。我が胸痛む。
４月来れり。一昨年を思う。我が胸新たなり。
４月来れり。１９２２年を思う。空しき喜びありき。
４月来れり。１９２１年を思う。我涙に咽ぶ。
４月来れり。１９２０年を思う。同心町の終りに近きころなり。
母上は如何に在ますや。我が為に盲目となりたまえり。
長兄は如何に在ますや。我が為に、己が十字架を負いて主に従いたまえり。
高島様の伯母様は如何に在ますや。キリストの愛を注ぎ給いて今天国に在り。
ああ来れり、１９２５年の４月は。復活祭も近からんとす。僕は何とあわれな人間ではないか。ああ、なやめる人よ、迷える人よ。汝よ、純正熱烈なる基督者たれ。信仰の実よ。信仰の実をならせよ。

○１９２５年４月２日（木）

晴。午前、大工仕事。湯殿の台をなおし、女中部屋に棚をつり、湯殿に棚をこしらえ、所々を整頓した。午後、武田の叔母様一寸見舞いに来られ、御一緒に出掛けた。本を読んでいるうちに叔母様が見えなくなった。外の方と話して居られるのかと思ったら、そうでもなくて。失礼した。丸善へ行って、ヒルティの『眠むられぬ夜のために』第１、２巻〔ドイツ語原書〕を大奮発をして買った。940銭である。蟇口（がまぐち）は忽（たちまち）に穴になってしまった。帰って来て、

母上、兄上にはなしたら、色々と叱責のお言葉を賜ったが。どうも垂涎措く能わざりしかねてからの希みの本、それを見付けた以上、買わないわけに行かなかったのである。そして、この本はいつまでも反読して楽しみ慰められるべき本であるから、敢えて馬鹿なことをしたとは思わない。つまらない本を多く買うよりか、食いあるくよりか、どんなによいことだろう。やっと、母、兄の諒解を得た。

晩、僕の進級を祝ってくださると云われたが、僕はこの本をかったから、よいと云うのに、そういわないでと云われるので、従って、ウナギを食べに行った。「心そこにあらず、さほどうまからず」であった。ことに虚栄の市の食いものやで食って、そんなに快いはずはない。我が内なる心と、そとなる口と眼と如何に反せしことよ。神よ、ゆるし給え。

我、不敬なる者、我落着かざる者よ。汝、理想家もよけれども、信仰の実ならざれば空しからずや。神よ、我は汝に摑えられ汝によって動きたく、切に願うものなり。アーメン。

年去り、また年去る。月去り、また月去る。日去り、また日去る。昨日逝けり、今日も逝きなんとす。明日来らんとす。

主よ、わが人生の目的は、真正の熱烈なる基督者たること、ただ之のみなり。願わくは、いと小さき日の如何に貴きかを知らしめ給え。願わくは、主によりて歩むいと小さき日の如何に感謝にして歓喜なるかを味わしめ給え。主にありては一日は千年、千年は一日なり。たえしのびて汝の生命を全うせよ。アーメン。

○1925年4月3日（金）

晴。神武天皇祭。起床8時、一家揃って朝食を認め、午前9時より大掃除を開始、兄と僕と二人で。僕が水戸へ行けば、都合がよい日が得られないので今日をすることにした。八畳の座敷と六畳と四畳半と六畳との畳上げをやったのである。ナフタリンを2箱まいた。畳を初めて持ってみたがなかなか重いものである。タンスや本箱やでなかなか思う様には進まないものであるが、5時までに全部終了した。入浴して帰って来て夕飯。お昼も晩も美味しかった。筋肉労働の如何に身体によきかを感じた。長兄の本箱の本を入れながら、つい読んだりしたので、11時近くになった。良書のみである。古本屋になんかやりたい本は一冊もない。

感謝に満ちて床に入る。今日は聖書を読まなかった。しかし祈りは切であった。

○1925年4月4日（土）

雨。神はよき日を与え給うた。昨日は晴天にて働かせ給え。今日は雨天で読書せしめ給う。兄上も馬術の教練なくて帰って来られた。喬さんが来られた。僕はぐずぐずものである。Tatuo the Delay〔グズグズの辰雄〕である。しかし見よ、である。神在ます。クリストによりて我は再生せり、新生せるなり。Tatuo the Worker〔働き人辰雄〕とならん。

何度も云う、何故に爾(なんじ)は此くもすべてに於てグズグズしていたか、またいるか。智力、鈍なり。体力、脆弱なり。意志、薄弱なり。あらゆる罪を犯せるものなり。何故に、虫ケラたるか、無用者なるか。

しかれどもまた云う。汝は一特権を有す。汝は一使命を有する。汝は弱し、愚し、鈍し。然れども、神の力は絶大なるものを其処に注ぎ給わん。かくして汝は人の力以上に強い、汝の心以上に大なり。人以上に卑うして愛の烈火にもやされて、神の聖業に献身なるを得ん。汝は最大のものを得たり。この世に属せるものにあらず、汚れなき朽ちざる、栄光なる聖国のものをいただけり。さらばすべての業を忘却し去りてパウロの如く希望と栄光に燃ゆる未来に向かって驀進(ばくしん)せよ。

"There is a Cross for thee!"〔十字架あり汝のために！〕と宣(のたま)う。

○1925年4月5日（日）

雪、後、晴。起きて見れば雪が降りつもっているではないか。驚いて「エッ、雪ですね」と云った。冬の様な風が吹いている。正9時、家を出た。市ヶ谷見付けへ大急ぎであるいて行く。山ノ手線が来た。ラン・アンド・ラン！　やっと間に合った。とびのる位のジャスト・インタイムであった。代々木で降りた。すぐ品川行が来た。渋谷で降りた。玉川電車も好都合で、よくはしってくれる。正10時に新町に乗りついた。徒歩5分、我が敬する愛する藤井先生のお宅へついた。急いで急いで、行きついたところはこの世の聖なるところであった。僕の心は何によるよりも潔くされ安んぜられる如くあった。先生のお室に今日も一番に着いた。先生のお集まりに加えていただく僕の幸なることよ。この安息日をここでその午前を潔く過ごさせて戴く有難さよ。僕は暫し、感謝にうなだれていた。やがて3人の男の方と3人の女の方が入って来られて、先生と8人であった。いと厳粛なるうちに、清浄なる空気につつまれて、愛の気に溢れて、神の在まし給う御前で、会は讃美歌第9を以てはじめられた。これについで捧げられた先生のお祈り、それは何と僕に切々とせまって来たことであるよ。

１９２５年4月5日のお祈り。終始アーメンを以てお答えするのであった。ヨブ記第9章第25節より第10章の終りまでを力強く先生は読まれた。讃美歌第81番、

うつりゆく世にも　かはらでたてる
　主の十字架にこそ　われはほこらめ。

何と8人の声は力強く高らかにとなえられたことであるよ。武蔵野の一角より聖なる歌が流れでて、天に響く。我等の父なる神は必ずききたもうた。

ヨブ記のお講義あり。讃美歌第450番を歌い、お祈りありて会は終った。色々のおはなしをうかがった。1時ごろ退散した。帰途、高島様に一寸お寄りした。かよ子様のお子様がお産まれになった由。よき報を得て嬉しくあった。伯母様をおもい、かよ子様を思う。帰

宅2時、昼食。夜、三弦様、ちづよ様来らる。こんど松戸へ行かれるのでお別れにおまねきしたのである。

『旧約と新約』58、4月号。

羔の婚姻、第25歌、静かなる細き声。教会論。1．教会の人格。2．創造の経綸中に於ける教会の地位。3．教会の生誕とその成長。地に物書くイエス、ヨハネ伝8章。神の途は尋ねがたし、ヨブ記研究其13。美しき印象を私に残した人々。

この最後の項に、小出義彦君、次に長兄政美のこと。望月すみ子女史、最後に高島鴻子様のことが記されてあった。高島様の伯母様と兄上、ああ二人は僕の、かつては地上の花にして今は天上の星である。ああ恥と罪のこの身よ。僕を愛して召されしこの御二人を思い見よ。如何に潔く、信仰に歩まれしことよ。泣いても泣いても、僕は駄目である。

かよわきわれは　おきてにたへず
もゆるこころも　たぎつなみだも
つみをあがなふ　ちからはあらず。アーメン。
じふじかならで　たのむかげなき
わびしきわれを　あはれみたまへ
みすくひなくば　いくるすべなし。アーメン

けがれの心よ、虚栄の心よ、ああ我、けがれと慾の我。
主よ！　十字架よ、たすけ給え。アーメン。

1923年は何と重大なる年なる哉。

1921年9月22日に「一粒の麦まず地に落ち」たり。

1922年はその麦未だあらわれざりき。その年末に至りてやや芽を出せるが如し。

1923年の春、その芽は明らかに萌え出でたり。大手町ありき。芽はまずまず生育し行く如く見えたり。

1924年もかなりよくのび行く如く見えたり。しかれども1924年4月俄然、我病を得て、わが信仰のおとろえたる兆（きざ）しを見たり。そはその病のあきらかに我が不信の結果としてあらわれたるものなればなり。然れども病によりてまたもや信仰はよびかえされたり。順風に驕りがちなりし我はこの病によりて聖旨の幾分かを知り得たり。麦は枯れずしてかえって勢いづけり。

1924年9月、我は岐路にたてり。学校へ行かんか、家にとどまりて健康回復に専一ならんか。人言多様なり。我が心迷う。そこで我は、兄上の墓前に祈りをなし、また帰りてよくしずかに祈りて聖旨を聴けり。神宣（のたま）い給う、「行け」と。そこで僕をうごかす何物も、もはや僕をうごかすにはあまりに価値なきものとなれり。敢然として水戸に立つ。忍び勤めてて、幸にも第1学期の成績のうめあわせをなし得てここに進級するを得たり〔第3学年へ進級〕。あまつさえ、13貫の健康体を賜われり。

まことに弱き、つまらなきことではあったが。この小さき我も、とにかく、賜わりし信仰の力によって、かくなるを得たり。我が精力、我が体力、これは薬石や所謂養生なるものによって得たものでないんであること明らかである。僕の実験にうったえて明らかである。これは神の力である。信仰の力である。人は言う、温泉がきいたのだの、なんだのかだのと。しかし、霊の生活を活きんとする私にはかかるものは殆どきかないのであろう。ただ霊の糧によってのみ我が健康は来た。

然れども、けがれと罪のかたまりなる僕は、以前として然りである。

１９２５年に入りて神の恩恵は一段と益した如く思われる。我が身体や智力の故にあらず。その信仰の心によりてである。

しかれども、ヤコブ書第2章に言う。信仰の行なき僕は未だ本当の信仰が足りないのである。かの兄、かの伯母様。而して、内村先生、藤井先生、畔上先生、塚本先生在います。偉大なる日本の使徒が今生きて東京に在ますんである。どうして我々は偉大なる先生方に従いて福音の恩恵にあずからないで居られよう。

不信国に於ける我々基督者は、パウロがローマに入りし頃に於けるとも先ず言えよう（あの迫害はなくも）。主キリストの福音は真理にして愛なり、力なり。何のこれに如く宗教、哲理あらんや。十字架の許に我等は確く立ちて、決して動かざる戦士である。福音のあかしをせざるべからず。この世にならわず、誘われず、彼等を感動せしむるはたらきなかるべからず。世の光、地の塩である。

この環境に置かれたる私は何と幸なる哉。我がために非ず、人のために、キリストのために、我は捧げられるべきものである。

１９２５年はその第一準備の年として何と重大なる年ではないか。

明後日、水戸に立たんとす。

父なる神よ、願わくは、貴き日々を、主によりてしっかりと歩ましめ給え。一言にして言えば、これのみが切なる私の願いであります。

母上をよろこばしめ得る子とならしめ給え。伯母様、兄上の跡を確く歩ましめ給え。それから未だ救われざる叔母様、親戚の救いに至らしめる様、我が日々の生活を基督者的ならしめ給え。

私の智力、体力をかれこれ思い煩うことなからしめ給え。ただ主にたより信仰によりてのみ歩めば、万事は主がよくし給いますことを信じます様にここにのみ歩ましめ給え。

藤井先生のお眼を先生の全く天命までもちいさしめ給え。来るべき年よりは先生のおやくにたつ私とならしめ給え。日々聖書をよまざればすごすあたわざるものとなさしめ給え。

安息日は必ずきよく、試験の前日といえども主のことに聖日をすごす身、幸なる身となさしめ給え。貴き主イエス・キリストの御名を通して願い奉ります。アーメン。１９２５年４月５日夜10時半。

〇1925年4月6日（月）

晴。起床8時。10時頃、井本様へ行く。神楽坂の本屋をのぞく。午後4時頃、富永先生へ一寸母上をお伴れして行く。青木へ行く。青木では泰ちゃんのお祝の宴である。武田の叔母様、渡辺の伯母様、母、僕が招かれた。賑やかであった。彼の健康を祈る。帰宅10時、いよいよ明日、水戸行きである。信仰のよき戦を戦わんがためなり。汝はこの為に召されたるなり。アーメン。

〇1925年4月7日（火）

晴。起床8時。水戸へ立つとて荷造りをする。荷作りと云って本をリュックサックとカバン（新しく買って戴いた、白い頑丈な布のもの）とにつめこむことである。共に本で一杯、非常に重い。例によって、僕の計画オンチを知りながらもどうもこれだけ積めこまなければ足りない様な気がした。朝食をしたため、母上と炬燵にあたっていると、僕の予想通り宣ちゃんが来られた。斎藤さんに一寸御挨拶して、11時半出た。第4年目の水戸である。3年終えて1年の水戸である。3年すんだから独逸語なんか相当力がついていてよい筈なのに、一向貧弱で怠慢さ加減には恥じざるを得ない。第1年目は第1学期だけ、文法の初歩のみ、あとは病気のためぶらぶら。第2年目は、第1学年のやりなおし、これほとんど文法のみで読本をやったとは云えぬほど。第3年目の第1学期は、禍なりし哉。病気にてほとんど勉強せず、読書せず、力つかず。第2学期、第3学期で、幾分わかって来たようなもののはなはだ微弱である。それが即ち今日の状態である。愚と怠慢との相乗積だからおどろく。この1年は長足の進歩を要する。

車中、畔上賢造先生の『歩みし跡』を読み、深く考えた。頁は進まなかったが、多く考えさせられて、実に有益な、楽しき時間であった。友達が外(ほか)の車にいることを知っていたが、僕は今日は静かに書と共に車中をすごさんと態(わざ)と彼を呼ばなかった。トロウ〔Henry David Thoreau〕と共に、

“I love to be alone. I never found the companion that was so companionable as solitude. We are for the most part more lonely when we go abroad among men than when we stay in our chambers. A man thinking or working is always alone, let him be where he will.”

〔直訳：「私は一人でいるのが大好きです。私は孤独のように友好的である仲間を決して見つけませんでした。男性の間で海外に行くときは、部屋にいるときよりも、ほとんどの場合、私たちは孤独です。考えたり働いたりする人はいつも一人です。彼を好きな場所に置いてください。」〕

と云わざるを得なかった。そして今（9時半）この桐寮に独り主を思うとき、聖なる嬉しさ、賑やかさ、楽しさ、暖かみを感ぜざるを得ない。ルーテルが机上に立った。彼は2年昔と

かわらざる炯眼（けいがん）を以て僕を見ている。16世紀に於ける肉体の彼を想像し、20世紀に於ける霊の彼と交う。

愛すべきかな、ならうべき哉、トロー！　旗幟（きし）鮮明、不浄なる点寸毫もなき彼。真勇はここより出づと思った。小さき我が政美兄を憶ってまた同感なきを得ず。その弟なる僕もまた然らずして可ならんや。然り、旗幟鮮明の人、真勇の人となりて、主のために聖戦をなさん。福音のために全生涯を捧げん。全く、「何ぞ人をおそれん、世をおそれん」である。我小なりと云えども、無力なると云えども、ただ主に在りてのみ、すべてが得られて、大愛、真勇、堅忍、信仰の人たるなれ。

ホイットマンの歓喜、死を踏みつけた歓喜！　然り、すべては善なり、すべては然り！なり。お父さまなる神、我が地上の生涯をあやまたせ給うことなし。絶対になし。独子、基督なるイエス、来り給えり、復活し給えり、昇天し給えり、再び来らんとす。ハレルヤ！　アーメン。

車中、地上に生ゆる一雑草を見て、宇宙の完全を見ると感じた。僕は、切り花をかざるよりも、庭に一介の草を植えるに如かずとなすものである。生命あるものをこのむものである。故に、書籍にしても、学校以外の書にあっては、生命をそそぎこんでくれる本、青線を付けて、然り！然り！と云って読むべき書でなくては殆ど全く読まない。現代の小説の如きはむしろ知らざるをほこりとなす。現代の文士、随分世間にもてはやされて居る人が多くある。その著書もよくうれて知って居なければ恥ずかしい、はなせないほどのもあろう。しかし、僕は断然、読まんとしない。彼等は切り花の如きものである。栄えたかと思うと、忽ち枯るるものである。花火である。我何の関わりあらんや。我が眼と脳力はそれに費やすにはあまりに余裕をもたぬ。あまりにきよくあるとさえ言いたくなる。

主のために、そしらるるはむしろ幸なり。現世の損害、迫害、現世の眼の喜ばしとせざるもののすべてはこれ返って我等にとりて益あることなり。人言なんぞ、である。色々なことを思って、天のこと、霊のことを思っている中に、我が心は大、また愛、また強となりて、神、我と共に在まし給うと実感した。御父様、我が見えざる頭上にほほえみ給うと実感した。我が聖なる思いの導きをしてくださった、先生の書に感謝した。偉大なる使徒、内村、藤井、畔上先生等よ。

僕は大学の何れを志望せんか。まだ1年先のことである。文科を志望して高等学校の語学の教授にならんか。教授になったら、それが勿論目的にあらず。教授は我が生計のためならん。我は聖書研究に、福音のために、あるいは伝道をするやもしれず。我が願うところは或はこの道なるやも知れず。

独語へ行きて法律を研究せんか、英語へ行かんか。政治へ行かんか。或はまた、経験へ行かんか。先輩の言様々なり。我迷う。然れども我は知る、何れの道にも神の示し給う道へ行くべきことを。今は、はかりしるべからず。ただ我が霊性の向かうところは一なり。

我は竟に福音を棄つる能わず。我が生涯はこの不信の世に於て、たとい小なりとは云え福音のあかし主のために、十字架の印鮮やかなるものたるべきである。我もまた小さい十字架を負わざれば生くべからざる身となれり。幸なる哉。貴き一日一日、お父様の授け給う貴き一日一日。それは我が生命であり、目的である。それを十字架を負いながら歩む、そのことのほかに我が求むるところは一つだにあることなし。ああ、再臨の日まで再び来り現われ給う日まで。アーメン。

この世の人の賢なる計画となすこと、一つ一つ神の目より見て愚かなる不信なることなるを知る。

主よ、誠に幸なる一日をあたえ給うて、独り感謝の至りであります。僕のために毎夕、祈ってくださる藤井先生にお恵みの益々豊かならんことを。また、毎夜祈り下さる母上様にお恵みの増さんことを。一家のものの信仰のもっともっと切ならんことを。未だ救の曙光を見ざる親族のものにもやがて御光の及ぶ日を切に願いまつりて、待ちのぞむ次第でございます。

主よ、僕自身、信仰の益々切ならんこと、そして、よき実の日をそれに伴いて、福音のあかしを不信の徒に示させ給わんことを切に切に願い奉ります。アーメン。10時10分。

○1925年4月8日（水）

曇、雨。お午から5時頃まで曇、それからまた雨となった。春雨らしい。シトシトと降る。登校、成績を見る。殿（しんがり）を仕（つかまつ）る。誠に当然の地と思った。一番は勤勉家高橋。ビリは愚鈍薄信の小池。よき対象である。その間に40名（約）あり。さてこの小池は此くあるべき小池か。依然として愚鈍にして薄信の小池か。二階へ上って、3年乙組の室に入る。僕の席は、廊下から3列目の最後。前学年、高橋良助君の居たる地。何だか妙な暗示だか、感じだかを得た。いいところだなと云う奴に二人居る。一人は、そのカンニングをするのに、また先生に牛耳られないためにいいところだと云う。一人は、一番の居た地位なるが故に、一番になっちゃえと云う奴である。とにかく、二階へはじめて上って嬉しかった。午後、村上先生のお宅へ行きお礼を云う。奥様にお目にかかった。母と僕のことを心配してくださったから。教科書と『ペスタロッチの新生』という書を貰（もら）った。

殿りで及第したことを書き記念とした。生まれて初めてかもしれない。恐らくそうであろう。よき経験であった。真面目に考えて、よき一年であった。失敗の一年であったと共に、また感謝の一年であった。

夜、藤井先生へ御手紙を少し長く書いた。まだ書きたいことはあったが、この次にした。先生に感謝するのあまり、この次の日曜出席するとは思ったが、書かざるを得なかった。

高島の伯母様の御手紙を読んで、涙と感謝であった。その生命に生き生きとした筆跡を見ては、未だこの世に居られる様な気がしてならなかった。

今日も相変わらず一人、机上のルーテルがオソロシイホドはっきり見ている。何か云わんばかりである。旧約聖書創世記第1章第1節のみを朗読した。

「**元始に神天地を創造したまへり。**」

新約聖書マタイ伝第1章を読みたり〔ドイツ語で〕。

○1925年4月9日（木）

晴。「平信徒の活動と家の教会」（『聖書の研究』3月号）は如何に強く響きしよ。私もまた平信徒である以上、この覚悟なるべからず。教会論（『旧約と新約』4月号）なんたるのぞましき理想よ。高き遠き前途よ。道は内にあり、外にあらず。形にあらず。

「我らの主は一つ、信仰は一つ。バプテスマは一つであるように、我らの生命も実は一つである。さらば兄弟姉妹よ、我らをしておのが生命の周囲に高き塀を築いて相離れしむることなく、却て同じ血潮の不断にかよう肢体のように、今少しく自由に愛と同情とを交換せしめよ。今少しく相互の或は共がき或は甘き酒杯を分たしめよ。」

アーメン。その一節の前部も揚げねば気がすまぬ。

「この故に私はいう、個人主義は基督者生活の敵であると。ひとしくキリストの霊を受けて生まれかわり、ひとしく彼の体の肢たる関係に結ばれしものが、自己のみを守って善かろう乎。我等の生命の籬（まがき）は既にキリストにありて撤去せられた筈である。我らは一本の葡萄に連なる枝として、同じ生命の連帯所有者に過ぎない。然り我らの主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ……」

アーメン。小池辰雄、何とよき名なる哉。かくれたる小さき池より雄々しき龍が昇ると云うのである。名にふさわしき実のあがらんことを。

聖霊による確信の言は凡て同じ基より出づるものである。それ故に、知られたる人、無名の人を問わず、すべて同じ聖霊によるの言は暗合するところあり。人に偉・凡なし。聖霊によるとき偉なり。葡萄の枝なる信者の主にありて一つなるの証なりと思う。

藤井先生の毎夕のお祈りに感謝し奉る。先生、ああ先生、恩師、先生を讃うる言葉を知らない。先生の人格、偉なる哉。

今日、学校へ行ったら教室の席順が変わっている。窓側から2列目の一番前である。「どうも、やっぱり僕は前に縁がある」。松濤と対象の位地にいる。聞くところによると、僕の先学年の第1学期の点は、第2学期、第3学期の平均点の4割だそうである。第2学期は70点。及第平均点は60点。故に、第3学期は80点なければならない。すると第1学期は30点となり、30点と70点と80点で180点となり、3分して平均60点となり辛うじて及第して、最後、殿（しんがり）となったわけである。今考えてみると、ゾットする。よかった。かるわざだった。3学期、岡村先生にあれだけの御注意を受けなかったら、僕はあれほどガンバラなかったかも知れぬ。おかげで大いに畏れをなしてガンバリ、80点平均と云う自分ながらおそるべき点をとっ

たわけである。思えば、戦慄すべき、また愉快なことだった。過去一年はなかなか味があった。勿論これ以外のことに於て更に更に。何んと考えても感謝は基督者の特有、特権である。

１９２３年、１９２４年、１９２５年、……

Christian Life Forever and Ever. A-men.

〔基督者の生命は永遠にそしていつまでも。アーメン〕

東京の兄上Mの本箱が僕の眼に輝く。良書、良友、同心町の兄をおもう。

勉強する前に祈ることはどんなに、僕の脳力、精力に力を与えることだろう。祈りの人よ、祈りの人たれよ。兄上と伯母（ママ）様と近くに在ます。マタイ伝第2、3章〔ドイツ語〕、讃美歌〔ドイツ語〕の練習、聖書。

○1925年4月10日（金）

晴。朝寒し。大気清澄。快然たるものあり。歴史の時間ありたるのみ。今日も無為。帰宅後、窪島様へ参上。フリージアとプリムローズとを贈る。我が心なり。主にありて耐え忍ぶものは幸なる哉。我もまた願わくは。杉浦、僕が英語の讃美歌“Some day the silver cord will brake”を歌って居るとき突然帰って来た。僕は感謝と希望に溢れて高唱して居たところであった。彼の笑顔輝けるを見て嬉しく迎えた。彼、よく人に尽くしたり。その労を互いに慰めあった。先学年の終り、彼と近藤を看病しつつ、机を相対して彼は歴史を、我は独逸語を東天の白まんとするまで勉強して最後のガンバリをなしたる一夜が二人の眼前に髣髴として来て、相語った。「美わしき印象を残した人々」に於て藤井先生はM兄上を

「君は近代人の腐敗しきった情性を遥かに見下して曙（あけ）の明星（みょうじょう）の如く輝いた。」

と記された。ああ、曙の明星。何と美しき輝きよ。僕は何度天体のそれを見たことか。あの幼かりし頃、あの光を見たときの感は如何なりしぞ。地上近く、我が兄としてこの星ありし我は如何に幸なりしぞ。而もそれをよく知る能わざりし、否、それを共に歩み得ざりし我は如何に悔やむべきものなりしぞ。

ああ、肉体にて連なれる我。我もまた塵を好まず、天を指す。我が指すところはかの明星なり。明星よ、明星よ、夜な夜な我を聖なる道に導けよ。

〔註参考：英文歌詞と直訳。戦前の賛美歌533番「しろかねのひもの、たゆる日はありなん」。この歌は兄政美の愛唱歌の一つで、同心町時代に美しい声でよく歌っていた。辰雄はその兄を思いながら歌っていたのであろう〕

1　Some day the silver cord will break,
And I no more as now shall sing;
But oh, the joy when I shall wake
Within the palace of the King!
Chorus:

いつの日か、銀の紐が切れて、
私はもう歌うことはありません。
しかし、ああ、私の喜び
王の宮殿の中で目を覚ますとき！

And I shall see Him face to face,
And tell the story– Saved by grace;
And I shall see Him face to face,
And tell the story– Saved by grace.

2 Some day my earthly house will fall,
I cannot tell how soon 'twill be;
But this I know– my All in All
Has now a place in heav'n for me.

(Chorus:)

3 Some day, when fades the golden sun
Beneath the rosy-tinted west,
My blessed Lord will say, "Well done!"
And I shall enter into rest.

(Chorus:)

4 Some day: till then I'll watch and wait,
My lamp all trimmed and burning bright,
That when my Savior opes the gate,
My soul to Him may take its flight.

(Chorus:)

そして私は彼と向かい合って
話をします――恵みによって救われましたと。
そして、私は彼と顔を合わせて、
物語を語ります――恵みによって救われましたと。

いつか私の地上の家が倒れるでしょう、
私はどれくらい早くなるかわかりません。
しかしこれは私が知っています――私の大切なものは
今や私にとって天の場所にありますと。

いつの日か、黄金の太陽が
バラ色の西の下で薄れると、
私の祝福された主は「よくやった！」と言うでしょう。
そして、私は休息に入ります。

いつの日か、それまで私は見守っています。
私の灯火はすべて整えられ、明るく燃えています。
私の救い主が門を開くとき、
私の魂は彼に向かって飛んで行くでしょう。

○1925年4月11日（土）

晴。登校、3時間の授業あり。4時間目、独逸語なし。これを幸、大急ぎで桐寮に帰り、支度をととのえ、水戸駅へ急いだ。汗が出るほどであった。幸い電車あり、12時10分の列車で水戸を立った。車中、読書に余念なきとき、高校生入り来り、前に坐するにより話さざるを得ざるに至り、書を置いて話すこととした。話すからにはイヤイヤでも人の感情を害すものなれば己れの心を入れかえて、カラリとした気持で話した。そのため、またかなり面白くすごし得て、之もまたよきことをしたと思った。帰宅、母上様お留守。兄上姉上居られて嬉しく迎えられた。12時すこしすぎ、母上様、宣ちゃんに送られて帰宅された。かの泰ちゃんのお祝の晩、宣ちゃん来られず、武田の叔母様のみ、我に言い難きの悲しみあり、聖霊をいたましめた。果然、それは形をとってあらわれた。今晩、青木で何やらあったらしい。切なるお祈りの後、やはりどうしても人の交わりは神によるにあらざれば真の平和なく、愛なきことを示されて涙であった。言いがたきの嘆きと、また希望のうちに眠りに落ちた。

○1925年4月12日（日）

晴、後雨、後晴。復活祭。天候は如何にもあれ、我が心はよろこび勇みてはやく出でんと躍る。この度、帰京した理由の一つはこれにあったのである。ああ、復活祭！　聖なる復活の朝、藤井先生のお宅に参上した。今日は第3回目、また第1着であった。中山博一様はいつも宇都宮から出て来られる。その熱心、僕も事情がゆるすならばである。しかしそれはまた体力にも関わる。車中4時間とあまりに飛脚的にして月曜にさしつかえる故に、ちょっと持続に困難なことである。

日曜ははるかに先生方と共にその午前を独りおくるより外ない。12日の復活祭、先生のお話を書かんとするならば、多々あり。今、時間ゆるさず略す。ただその「うるわしの白百合」を歌いしときの如何に私達一同がキリストの復活を強く感じるか、そのお祈りに於て、そのお話に於て、そして讃美歌217「わがたましいを愛するイエスよ」、最後に「きよき岸辺に」を歌いし時、如何に復活と再臨の信仰に燃えたるかを思いおこして、感謝なりしお集まり、復活の朝なりしよとまた感謝に満つるのが何よりのことである。

1923年4月1日、大手町に復活祭の午前をおくらせて戴いたときを想起して、感慨無量なるものあり。また新しき希望と力とに燃ゆるこの頃は、かの日々を思い浮かべるに、ふさわしかるべき日々である。原始の純なる信仰に、確く立たんとすることのいかに恵まれたることとなるかな。日本のルーテル、内村先生、またその他、純真なる、また原始の香ゆたかなる藤井先生、畔上先生等に導かれてこの末の世に、幸にもきよく歩む道を教えられて、何と福ある哉！　さらば兄上の跡を、高島伯母様のお跡を、いつまでも易ることなくしっかりと歩まん。汝之がために召しを蒙(こうむ)れり！　アーメン！

午後から四郎ちゃんと井本常治様の還暦のお祝のお招きをうけて行った。30人ほどの小さい人々が群がっているのを見ては驚かざるを得なかった。色々のあそびをなし、琵琶も聞かせられ、いかにも還暦のお祝いらしいよいお祝であった。これを午前のhimmlisch〔天的〕なるに比すればいかにもirdisch〔地的〕ではあったが。また子供の純なるよろこび、笑いと共になって、大人も皆で無邪気に興じたことは、かならずしも俗ぽくなかった。しかし勿論、午前と比するものにあらず。午前の気分が急のこの変化によってみだされたのは僕としてかなしくあった。しかし、皆様のために、また面白くすごした。またお別れして一人はやく水戸へ帰るのも少しつらい様であった。東京を出るときは未だ雨が降っていた。水戸へ着いたときは星さえ瞬いていた。ねむい眼をこすりながら、ようやくたどりついたときは12時すぎであった。電車がなかったのにはがっかりしたが、すぐ気は神によってとりなおされて、「歩けよ！」との仰せであったから、さほどつらくも感ぜず、むしろ足波一定に。忍びて帰り来た。桐寮は電気のみアカアカと僕を待っていたかの如く、人は居らず。杉浦も引っ越した。近藤はまた来ぬ。しずかに祈りつつ眠りにつく。

〇1925年4月13日（月）

晴。今日はすっかり春らしく、辛くも昨日帰って来たことを喜んだ。また、グンデルト先生に久しぶりでお目にかかる様であった。二階の角の3年乙の教室でまた一年、先生に練って戴くのかと思ったら、躍らんばかり勇み立って来た。勉強せざるべからず！と確く思った。先生もニコニコした顔で迎えて下さり、嬉しくあった。熱心な先生はその態度が全然ちがう。残念なことにはグンデルト先生ほど熱心な日本人の先生をこの学校に見たことがない。生き生きしている活気がある。これは何によるか。先生のうちに宿るある力による。僕もまた、ある力によって熱心に勉強しなければならぬ。

最前列（第1番）に位する様に、先生に指されること頻繁である。僕とならんで同位地に須永、武井（礼）、松濤が居る。放課後、富山を訪い、唯一の基督者の友かれと親しく語った。本もかりて来た。彼の絶倫には驚嘆すると共に、また僕も負けじと、負けじ魂をひるがえした。とにかくもっとコツコツ毎日、休まず倦まず勉強しなければならぬ。

夜、武田の叔母様、井本様に書簡を認める。雨のみが今晩の友、寂然。

〇1925年4月14日（火）

晴。今日からきめることがある。我々、旗には「神宣う、働け、働け」とある。故に今日からきめることがある。それは幾度か企てて遂に本当に持続することのできなかったことである。それを持続せよと云うのである。之は僕にとって非常な難事である。しかしこれは死活の問題である。最重大の問題である。これに常に負けていた僕は今まで死への道をたどりつつあった。怠惰、無為、失望の道をたどりつつあった。故にこれを果たすことは正に僕の生に対する、勝利に対する必要かくべからざる重大事である。それはしかし事柄は簡単である。日常の勤勉、一言にして言えばただこれだけである。最早、僕は身体のことをかれこれ顧みる秋（とき）でない。身体はよく働くときに、神様がよく健やかに保って下さる。神は我が天分の全うさるるまでは我を害（そこな）い給わない。忍耐して我がソール〔霊魂〕を全うすればよいのである。それが最大のことである。ソールはまた実なくして全うされないのである。その実が今、企てなさんとするところのものである。

朝6時より7時半までに起きること。冷水摩擦をなすこと（2年前より実行）。朝、聖書を読むこと。殊に詩篇。節食すること。神の命じ給う以外のものを食せざること。運動は必ず1時間は之を為すこと。活発なるを旨とす。独逸語を猛烈に勉強すること。授業時間を有効に費やすこと。而も神に導かれて歩まんとする身なれば、徒然（つれづれ）なること、怠惰なること、くだらぬ雑事に時間を費やすこと、義に勇まざること、雄々しからざること、これを一切厳禁す。これ大罪なり。日記、書簡、これまたおごそかなることなり。聖書、宗教書。10時より12時までには必ず就眠のこと。睡眠時間は少なくとも7時間を要す。

「福音は律法を全うせんために来れる」

ことを憶えよ。大体、次の如し。

A.M. 7:00(6:30)まで　起床。冷水摩擦、聖書、詩篇。
P.M. 3:00～4:00　運動、a little pause〔少憩〕。
P.M. 4:30～5:30　1時間（夕飯まで）復習、予習。
Supper〔夕食〕後　Hymnus〔讃美歌〕、a little pause。
P.M. 7:00～8:00　予習完了。
P.M. 8:00～9:00　Deutsh Bibel or English〔ドイツ語または英語の聖書〕
P.M. 9:00～10:00　聖書30分、その他基督教書類。
P.M. 10:00～11:00　日記 or 書簡 or 読書。
P.M. 11:00までに　就床。12:00となるは極特別なる場合。

要するに、起床、食事、運動、勉強、就床の時間を大体規則正しくなすこと。これ時間上の律にして、精神は真正なる基督者たるに在り。別に1ノートを設けて読書に関してしるさんと思う。読むべき良書多し。その多読を励むべし。学校のことは、已むを得ざれば8時半、大体に於て8時までにヤッツケテシマウこと。それからあとは聖書その他基督教に関して。

また言う。7時までに起きて、冷水摩擦をしてしまって、正7時に机に向かいて聖書を読むこと。その他『日々の力』Daily Strength を読むこと。or 詩の本を読むこと。授業時間は有効に。昼休み、新聞。

放課後、4時まで運動。

4時半より机に向かいて学校のことをはじめ、8時までに。後、予習完了のこと。

8時より独逸語、バイブル。Für Schlaflose Nächte〔眠られぬ夜のために〕、u.s.w.〔その他〕。

9時より、基督教書類、聖書30分。

10時より、日記、書簡等。

11時までに必ず就床。

『聖書の研究』4月号によって先生から叱られるところあり。大いに鞭撻されて、力を得た。感謝である。願うところはただ、本当に“Christian”になりたいことである。

○1925年4月15日（水）

曇。

我なんじらの中に歩み、また汝の神とならん。汝らは我が民となるべし。

勇心勃々と起こりて、奮然として勉強せんと起てり。ああ、我が過去の如何に怠慢遅鈍なりしよ。我は今日、健全なる身体を賜われり。最早、我身体のことを思い煩わじ。ただ神に依りて営々と働く身となるべし。神はよく我を知る。我、乏しきことなし。何を思い煩わんや。我はここに勤勉の生活に入らん。我が生命はこのうちにあるべければなり。

貧弱なる語学の力に、この1年に長足の進歩を与え給え。我は読みて読まん。休まずに倦まずに毎日々々。しかれども、あせることはせじ。恒心を以て、動きなく。

今日、漢文の時間、韓非子翼毳（かんぴしよくぜい）を著したる太田全斎の三年の話、蒲坂の話は、今日の僕の気分に――火に――あぶらをそそいでくれるものであった。開始、働け！　働け！　神を畏れよ！　アーメン。

昼休みに松濤、高橋と散歩をした。グンデルト先生の3時間は貴い時間である。僕の最も熱心になり得る時間である。今日は和文独訳であったが、実にその根本的、要をうがちたる講義にはさすがにグンデルト先生だと思わざるを得なかった。今日は eben のいい使い方をおぼえた。要するに一国を他国語に訳出するには両国語の心をよく解してから（文章の心を）字に拘泥（こうでい）することなく、訳出して、而して真の訳が成るのである。模範文をよく暗記して、これを公式として他に類推することは語学に大切なことである。

……〔独文省略、Für Schlaflose Nächte. 15. April〕……

○1925年4月16日（木）

晴。独逸語に英語にと今日は指された。午後からの経済の時間の眠かったこと。一番前なので居眠りも出来ず、その辛さったらなかった。その次の体操の時間には眼がさめて、バスケットやヴァーレー〔バレーボール？〕で汗をかくほどだった。身体のコンディッションがよくて、身体の運動活発である。心身共に lebendig〔活気的〕である。

“Sei lebendig!”〔活気あれ！〕

“Wachen Sie auf!”〔目覚めよ！〕

とは Herr Gundert〔グンデルト先生〕が第3学年第1学期第1時間に我々に叫ばれた語である。而して

“Sei freissig!”〔勤勉であれ！〕

“Arbeiten Sie! Arbeiten Sie!”〔働け！　働け！〕

である。

○1925年4月17日（金）

晴。起床8時。水戸創立記念日につき休みである。午前、机に向かいて。午後、町へ。また机に向かいて。晩、机に向かいて。読書読書。汝の労働は読書に在り。読め、勉強しろ、独逸語を。3年乙の仕事は独逸語のみ。ルーテルの聖書を読め。彼の絶倫の精力を思い見よ。聖書のユーベルゼッツェン〔翻訳〕は何年月にてなりしぞや。Luther und Hilty und Korber、何と良い先生ではないか、友達ではないか。働け！働け！急がずに、休まずに。

○1925年4月18日（土）

快晴。登校。小麦と大麦の新緑‼ 汝等は冬ふみにじられたるが如く、死せるが如く憔悴（しょうすい）してありしが、今は復活して生々として天を指して喜ぶ。ああ、我もまた今までは心身憔悴せるが如かりしが今は――１９２５年の春こそは――復活して更に新しき生に入れり。感謝なり‼ ……〔Frühling（春）の詩、独文省略〕……。

12時、学校がひけるとすぐに、荷物（カバン）を桐寮に置いて、停車場へ急いだ。12時35分、徒歩で行き着いた。暖かくて汗が出るくらい。40分、列車はスベリコンダ。渡辺の伯母様、三弦様、千鶴代様、隆ちゃん、いわの5人は間もなくその客の中から現われて来た。喜んで迎えた。僕が女中いわをつれて、松の小路なるお家へついたのが2時頃であった。少しお手伝いをし、3時頃、運搬車が着いた。お手伝いをして6時頃大抵落着して、7時には全くおちついて、皆でオソバの夕飯をいただいた。案外速く事がはこんで僕も気持がよかった。8時頃、桐寮に帰った。労働をした所為か、お腹はすくやら喉はかわくやらで愉快だった。筋肉労働、人の身体はこれによって愉快で、疲労と熟睡と而して健康を全うする様に出来ているらしい。こんなつまらないことをしただけでも、原始人の勤労、筋肉を以てするものの云われぬ愉快さを思う。

桐寮へ帰って来て、桐寮を賄ってくれる女将さん、堀部はると云う人とすこし話し、彼女の一方ならぬ奮闘の人生を知って、また更に彼女の孝行心を知って嬉しく且つ、動かされるものがあった。純なる正直なるあわれみの心ある人はかかる人の中に在る。僕は彼女の心の幸福をよろこんでやった。人生の最も貴きものを彼女が得たこともそれとなく話した。僕はその実験の行程にあるもの故、彼女によって生きた教訓を得、彼女に感謝しなければならなかった。

誠に誠に僕は、母上、敬愛する我が母上一人の手によりて育てられた。母上の労苦は、思うも涙である。母上の犠牲はまた更に涙である。何ぞ、尋常（じんじょう）一般の高校生の心を以て心となして安閑として日を送りて可ならんや。また母上より受くる一銭は之をムダに費やすこと得ざるなり。幸にして、基督を主とあおぐの身となり、母上をおたすけして共に共に信仰に歩み得るものとなれり。働き働きて、母上様の鴻恩（こうおん）に報ずるところ無かるべからざるなり。然らずんばその罪、死すとも贖われざるなり。

神よ、如何なる道にも神の与え給う道に。我、母上と兄上方々のために主によりて歩まんとぞ切望す。願わくは、導き給え。アーメン。

三弦様の新家庭に祝福あらんことを。願わくは、主の光の十分にそそがれんことを。御用ならば我を御業、御光のために用い給え。アーメン。

来るべき一年、貴き一年なるかな、忘れ難かるべき一年なる哉。

〇１９２５年４月19日（日）

晴。水戸へ来て初めての日曜である。午前10時から、はるかに藤井先生とお声を合わせて独り祈った。11時に至りて、インテラプト〔邪魔する〕されざるを得なかったのは残念であったが、よき午前をすごした。午後、洋画展覧会を見に行った。いや、ついでに見たのである。それから三弦さんのところへ行った。アネモネとスミレを持って行った。高校の方へと散歩した。

夜７時から商業会議所へ。二瓶要蔵氏の「孔子、釈迦を論じ、基督に及ぶ」と云う講演を聴きに行った。讃美歌、祈祷もあった。至極わかりやすく、（聴者に学生少なきためか、女子が多きためか、或ははじめからこの調子であったのか、おそらくやはり最後の理由によってであろうが）話された。二瓶先生自身は如何なる信仰の方か知らなかったが、いかにも温和な人格の方らしい。ただ僕が非常な期待を以て行ったのに、それを裏ぎられたのは至極残念なことであった。先生はなぜもっと基督のことを説かれなかったのか、何故もっと強く力を入れて熱烈に説かれなかったか、誠に残念な次第である。あるいは題があまりに大きすぎてまとまらなかったのかも知れぬ。更にまた遺憾に思ったのは、我々各自の心霊に訴える基督教にあらずして、主として社会改善のための基督教であったことである。また、先生は基督の復活、今生きて我等と共に在ますとの一大生命を説かれざりしこと（あるいは言外にふくまれていたかも知れぬが）、あれでは聞く耳あるものにあらざれば、あまりに基督教は弱きものである。光、力と云われたが、意味が徹底しなかった。その熱のとぼしかりしによって、皆が最後の讃美歌をうたうとき、はたして彼等は感謝にあふれて讃美しているかを疑い、聴衆と声を合わせることを得ず、独り残念ではあるが、皆のために真の信仰に生きんことを祈ったのであった。

しかし、講演は僕にとっては不成功に思われたが、先生の口よりも人格にどこか美わしきところあるを見て、先生を敬し且つ先生の心中を深く思うて、やはり感謝して帰った。

今日もまた、よき安息日。明日より Workstage〔働く舞台〕が始まります。願わくは、働きて働くところの一週間を与え給え。ますます、主と共に在りて。

〇１９２５年４月20日（月）

晴。畔上先生の『歩みし跡』は感謝を以て読み終えた。二度読んだとも言ってよい位読んだ。最後の「潮流を下瞰（かかん）して」は、感謝と共にまた大なる確信を与えられた。いざ泳がん千歳の磐を目指して。我も下瞰（かかん）せん、濁流を。

我争（いか）で我が身を我が欲心によりて害（そこな）うことを得ん。精神的にも肉体的にも、我は父なる神の器。肉にては敬愛する母上より賜われるもの。ああ争で我、我が慾のために売られるものとなることを得んや。

我はあくまでも義に勇むおのこ。

我はあくまでも愛のために献身なるもの。
我はあくまでも勤労に生きざるべからざるもの。
我はあくまでも原始的基督教徒と共に。
我はあくまでも天を指して聖国の来るを待望するもの。
ああ、聖なる新しきエルサレムよ、我が故郷よ。父なる神よ、我が眼は肉の眼、到底、父の完全と偉大とを見る能わず。我が心また信ずるといえども父の御心に比して、何ぞ弱き小さきものなるや。
父よ、救い給え、助け給え。我が信、望は見えざる、知れざるところにあり。誠に誠に感謝し奉ります。父は、我にこのけがれたる我にも、弱きながら、小さきながら、父の完全と全能とを仰ぐにあやまりなき方向に我が心眼を向け給ひしことを。
父、かしこにあり。我ここにあり。父見えず、然れども我が眼は御身に向かいて開く。父は我が弱きを知りてあわれむ。我は絶対の信頼を以て頼りて安らかなり。
父は明眼を備え給うもの。我は盲者なり、盲者は悲しみあり。父の今見えざることなり、然れども信頼あり、故に、見えざる父を確かに信ず。
父に、言い難きなげきあり、而して、父は全能なる神、かならず全うして我等を栄光のうちに住ませ給わん。然り、アーメン。
ああ、このこと、ただキリストの十字架と復活と昇天と而して、而して再臨とによりて、我は信じ得てあまりあり。ああ、これなくば生きるすべなしとは我が実感の強烈に訴うるところである。
主、イエス・キリスト様、どれほど私はエス様に感謝してよいのでありますのでございましょう。然り、私の最もよき感謝の仕方は、私もまた十字架に従いて、よりほかにないのでございましょう。主よ、いとも貴き日々を最も主のよろこび給う道に歩ませ給え。
Heaven!〔天国〕。Heart!〔心〕、Head!〔頭〕、Hand!〔手〕、わが内なる三つのH.よ。上なるH.にむかいて各その分を尽くせよ。
Three H's seem different, but they are one, and we are safe.
〔三つのH.は異なるように見えるが、それらは一つであって我等は安全である〕。
この3Hsは昨夜の講演中より得たるよき土産なり。
Education will end in vain but that stands on Christianity.
〔教育は、結局キリスト教に基づかなければ無駄であろう〕
Now deep real Christianity is ! Now fearful Our country's Future is !
〔今や深い真のキリスト教がある！　今やわが国の将来は恐ろしい！〕
But He leads us and all is safe.
〔しかし彼は私達を導き、すべては安全である〕
But, mind! We, Christians are the Chains of our country's life. Amen!

〔しかし、注意せよ！　我々クリスチャンはわが国の生命の鎖である。アーメン！〕

○1925年4月21日（火）

晴。忘れられぬ日。ああ、ルッター研究者、佐藤繁彦先生！　先生の『若きルッター』をかつて読みて感動するところあり。先生を慕うこと切なるの日、ルッターが僕に近づいて来たことの一段切なるこの頃、突然、今日、先生にお会い出来ようとは。先生！　僕は先生の風采に接して如何に先生の、謙遜なる基督者にして、しかもその温顔の中に深き熱烈の信仰の潜在せるを拝して、否、潜在にあらず、光となりて溢れ居るを――誇れる言葉かも知れぬが――見る人の眼、信仰の人の眼より見て――明らかに見て、如何に僕は先生を敬愛せしことよ。先生を訓務課分室にお招きして御講演を聴す。来れるもの幾人ぞ。ああ、現代の青年、汝等の心と眼とは何処へ向くぞ。汝等に対して憤怒あり。先生に対して、如何に謝せんかと。独り張りさけんばかりなり。

先生よ、ゆるし給え。少数の熱心なる聴衆あり。我等は多数の不熱心なる聴衆に勝るものと自覚すればなり。先生、よく、その心を知り給えり。先生、少数なる聴衆に対して万人に説くが如く熱烈に説き給えり。我、如何に感涙に咽（むせ）ばんとせしぞ。先生、願わくは我もルッター研究会員の一人となし給え。先生、今日、先生の真正面、最も近く先生に対し、熱烈な眼を注ぎて、心中、アーメンと唱えつつ先生の貴き信仰の実験とルッターの信仰とを拝聴していた青年は、いと小さく弱き、意気地なき小池辰雄なることを憶え給え。このものいかに意気地なくとも、キリストのために献身、キリスト我に在りとの信仰に生きんとするものの中で最も熱烈ならんとするの一人なり。先生の、今日の御足労に対する報いは、先生の今日の御熱弁に対する酬（むく）いは少なくもこの一青年によって幾分なりとも果たされるべきものなるを確信致します。我ちかわず、然り！　聖霊我らの弱きをたすく。我等祈るところを知らざれども、聖霊自ら言い難きの嘆きを以て我等のために祈る。ローマ書8・26。アーメン。

ああ、先生の信仰、ルッターのそれ。ルッターの小型を見るが如し。幸なり、ああ幸あり。我は内村先生、藤井先生、畔上先生、召されし兄上、高島の伯母様、母上様によりて。キリスト・イエスよ、来り給え。宿り給え。キリストのため、我は無し。

午後5時頃、移転した。松小路（まつのこうじ）なる青木の新しいお家へ。1時間にして終った。

○1925年4月22日（水）

雨、後曇。彼の日、よき日なり。兄上を憶う。午後3時半の列車で渡辺伯母様が帰られた。停車場で千鶴代さんと隆ちゃんにお会いした。自転車で行って来た。夜、女中が告げずして帰京した。彼女のために同情するところあった。普通の夜逃げと見ることは可愛そうであった。彼女はよくはたらく女であったらしい。心もやさしい女であったらしい。しかし、

遠地で奉公するにはあまりに気が弱かった。あまりに孝行心か親を思う心に偏していた。親のもとをはなれることが出来なかった様である。彼女がかくして去ったのは彼女のために惜しむ。申し出れば、三弦さんも千鶴代さんもゆるされたことだろう。

○1925年4月23日（木）

曇。午後から眠いこと言わんかたなし。経済のノート、つらかった。今日は千鶴代さん一人である。僕が帰って来て隆ちゃんと3人である。

夜、桐水会新入生歓迎会があった。中川楼で。鰻はうまかった。話はつまらなかった。僕の耳が聴くにはあまりに無関係なことばかりであった。ああ、高校生よ、附属の人もまた。僕はハタと睨んだ。ああ、おそろしき舌の彼よ、黒き心の彼よ、表裏あり、奸策の彼よ。汝は悪魔の子。我は神の子。何ぞ同坐して食するあたわんや。ああ、罪なりし食事であった。

去年のクリスマスのときの岡村先生が、聞くに忍びざることを云う教師連の坐に独り聖なる沈黙を守って居られたと云うお話を思い出して、僕も厳然とせざるを得なかった。基督者唯一人。誰か、祈祷して食事するものあらんや。彼等は皆、邪音に耳をたのしませるものである。8時半、決然として立って彼等に別れた。新入生は歓迎する。共に食して悪いことはなかった。しかし一度、我が心、快しとせざるに至りては誰彼の別なし。我は妥協すること能わざりき。それ神に反(そむ)くことなればなり。我は万人を敵とするも、神を敵とすることは絶対に能わざるなり。我弱くして、神のものなればなり。空談、空事に時間を徒費することは、この頃の僕に到底耐えられぬことである。これは明らかに罪悪と知る故にである。

怠惰は、罪悪であると神より直接に告げられた。己れの遅鈍は、已むを得ない。勤勉以て速やかならんことを務めることは大切であるが、怠惰は之を赦すことを得ず。

帰宅、三弦さんのお手伝いをする。ああ、一日に何をなすか。近頃の如何に近かき一日なるよ。無為なる一日よ。慙愧措(ざんきお)くところを知らざるほどである。ああ、一日の如何に速やかに逝くことよ。しかして、我がはたらきの如何に遅鈍なることよ。我よ、なさしめ給え。アーメン。

○1925年4月24日（金）

晴、雨、晴。一家4人、千鶴代さん、朝少くお気の毒と思う。隆ちゃんが居られてはなかなかやっかいなものである。放課後、杉浦を見舞った。

古事記をならう。「かくりみにます」と云う語がある。かくりみとは、正身＝現身＝マサミと云うこと。「目に見えぬ神が現実の世界にあらわれて目に見える形をとられたもの」と云う意味を知って、キリストの「かりくみの神」たりしことを思い、いい言だと思った。また、反対に「現実にあらわれ給いし神が見得ざるものとなりし」ときも用うという。故に、マ

サミは今我々の中にあるキリストのことも云い得。正身（マサミ）と読んで、我が兄を連想し、政美（マサミ）もまた、我が中にありて辰雄をたすくと信じて、これにまさる嬉しさはなく感じた。

日はうつり行く。来りて去る。去りて迎えらる。願わくは、さらにさらに。

この頃段々、我が前途の職業が見えてくる様な気がする。神様が時至らば適確に示し給うならんと信じて思い煩わずに安らかに居ることが出来る。相変わらず感謝の日々である。

○1925年4月25日（土）

晴。Oliver Cromwell born 1599.〔オリバー・クロムウェルは1599年4月25日に生まれた〕。

「汝、死に至るまで忠実なれ、さらば我なんじに生命の冠を与えん」（黙2・10）

第1時、休み。午、帰宅。少憩、斬髪、入浴。やや読書。三弦さん帰られ、キャッチボールをなす。夜6時半頃、喬さん、実さん、来訪。11時半頃まで皆で談笑す。急に賑やかであった。それより、佐藤繁彦先生へ、ルッター研究会会員にさせて戴きたく、お手紙を書く。就床12時半。

我は、母上、両兄に諸々の影響、遺伝、感化を受けるもの。心を強うして立ちて、己が分を知りてつとむべきなり。汝、内に充実せざるべからざるなり。汝は選ばれたるものなり。いと小さけれども、選ばれたるものなる上は苟（いや）しくも不信に流ることこれ罪なることをよく記せよ。

神よ、願わくは、堅忍、堅実、謙遜、勤勉、ならしめ給え。アーメン。

ああ、神よ、この世にて損するもの、虐（しいた）げらるるもの、誹（そし）らるるもの、愚かにせらるるものとならしめ給うとも、神をすてるものたらしめざれ。むしろ前のことは、これをよろこびて主のために受けるなり。願わくは、死に至るまでお導きをあらんことを。主の御手にすがりつつ歩まんことを。アーメン。

○1925年4月26日（日）

晴、雨。午前8時起床、喬さん、実さんと3人でお座敷に寝ていた。一同揃って朝食を戴く。午前10時半より一人籠りて、東京なる藤井先生のお集まりと声を合わせて、聖なる日の午前を神の御前に静かにすごす。11時半頃、已むを得ず、やめなければならなかったのは、これ事情致しかたなし。僕と共に聖日を祈りつつ、歌いつつすごすものなきか。水戸第2の安息日であった（今度来てから）。午後4時頃、彼帰り来られ、非常な陽気で車にて帰られた。雨が降っていた。夜の10時頃、もう一人の彼帰られた。非常にのどが渇いて居られた。すぐねむりにつかれた。夏みかんを食べてのち。天才か秀才か、とにかく凡人でない様である。彼等よ、愛する彼等よ、水？に飲まるるとき、何と可愛そうに見えるではないか、なんと嘆きてもあまりあることではないか。そこまで堕ち入ることが、この天才、

秀才に出来るのだろうか。水？の力はおそろしい。コントロールある彼等よ、我は憂えない。彼等はこれに耽(ふけ)れる人々でないことをよく知っている。しかし、もう一段上へのぼって水？を飲む人々で常にあらんことを祈る。

聖日はすぎゆく。人は知らぬ。言うべからざる感涙、感謝あり。

○1925年4月27日（月）

晴。午前11時に帰る。1時まで2時間の暇を得、実さんと遊ぶ。キャッチボールをした。千鶴代さんは毎朝、僕が早く出掛けるため、少しはやく起きていただいて御飯をたいて戴く。有難くある。日中はいつも隆ちゃんと二人である。お昼には、帰って来て、御飯をいただく。なりたけ、お手伝いをして上げたい。実さん3時半ので帰京された。

○1925年4月28日（火）

曇。体操、フットボールは愉快である。1時間はねまわる。随分渇して水が美味い。夜、コーヒーをのむ。三弦さんは大抵5時前後に帰られる。食後散歩をする。隆ちゃんを乳母車にのせて、帰るころは大抵眠って居る。

○1925年4月29日（水）

曇。毎日もよく運動した。富山茂君に、『基督の復活』を贈った。彼の家へ行っているときにスティール（Steele）先生が来られた。大分会話をしないので、もともとそんなにしたわけではないが、英語が出にくくて、シドロモドロであった。それでも、先生の云われることに対する理解力はあるから気づよい。御一緒、帰って来た。外人と二人で一緒に道を歩いたのは生まれて初めてである。天気と梨畠と日常生活の話を一寸した。昨日は、『ルッター研究創刊号』が送られて来た。感謝。歓びのあまりこの1冊を抱いた。

僕は、どうもだんだん文科の方へ向かいて行く傾向である。独文科へ行って、教授となり、神の義(コト)のための研究、献身をなさんものであるかの如く思われる。神は僕をとらえて、救霊の聖業の小さき器として用い給う様である。政治、経済、法律、社会問題等、これからの有為なことは大分ある様だが、どうもそれ以上に、たとえ小なりとも救霊のために僕をとりたもう様である。僕はまだ何(いず)れなるかを知らないが、とにかく、毎日々々は、犇々(ほんほん)して勤勉。以て語学に一大進歩を見ざるべからずである。今日この勤労なくば、悔ゆるとも甲斐なきを神はよく示されたのである。故に「旧き私」を棄てて、勤労する「新しき私」につかざるべからず。コツコツと毎日である。神の命にして、我が心の切に求むるところ、勤労、実に愉快である、快楽である。怠るとき、実に不快をおぼえるに至るは、神に感謝する次第である。我が努力にあらず、神、我が心をつかまえ給いしにある。故に勤労の中に楽しみあり、休息ありである。感謝なる体験なり。さらば、続行せよ。

また新らしき日は迎えられんとす。日は明朝またのぼるなり。

兄上、近衛師団勤務と内定の由。母上と共に東京に住み得る我々を幸と感謝する。すべて母上のために。ああその御奮闘は、如何ばかりなりしかをおもえば、今日の我がなす勤労未だ数うるに足らず。つとめよ、つとめよ、主のために、親のために。

○1925年4月30日（木）

晴、曇、雨。この2、3日は曇りかちでしかも少し寒い。雨が降った。入浴した。夜は早くねた。まだのろくてはかどらなくて癪（しゃく）である。はげめ、はげめ。ただこれだけである。